円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

1964

11月・12月

日本ＧＡＰニューズレター

—１９６４—

*11*月・*12*月号目次　　通巻第*25*号

興味本位の時期は過ぎた …… Ｇ・アダムスキー　1
質　疑　応　答 …… 7
十字軍戦士になるなかれ …… Ｃ・Ａ・ハニー　13
ニューズダイジェスト …… 17
生命の科学　4 …… Ｇ・アダムスキー　19
編集後記 …… 32

興味本位の時期は過ぎた

G・アダムスキー

米国中西部と東部を通じて行なった私の講演旅行は、ちょうど今終わったところです。これはかつてないほどの大成功でした。私を支援して下さった方々のご努力にたいしてお礼を申し上げます。

ウィスコンシン州のグリーンベイでは、その地区最大のテレビ放送局から放送しました。この放送局はノーブタイン兄弟の経営になるものです。私は先ずその放送局の支配人と二時間ほど話しましたが、彼は非常な興味を持ち、時間があれば私について歩いて各講演のすべてを聴きたいと洩らしていました。大変に感動したようで、番組のマネージャーを呼んでビデオテープに私の話を収めるように命じました。このテープは日曜日の午後五時に特別番組として放送されています。この番組の重要な意義は、或る強力な宗教団体がスポンサーになったという点にあります。そしてこのことは、正しいかたちで資料が提供されるならば円盤問題にたいする一般の関心が高まってくることを示しています。右以外にも私に放送させてくれた多くのテレビ、ラジオ局があります。

ワシントン市ではWTTGの第五チャヌルでもって放送討論会を行ない、私と共に次の方々が出席しました。ウェズリー神学校々長ノーマン・トロット博士、海軍天体観測所の天文学者B・L・クロック博士、アメリカン大学の物理学教授マーク・ハリスン博士。司会は〝ラジオ・プレス・インタナシュヌル〟のハリー・クラークスンです。この番組は私のためでなく円盤問題そのものにとってきわめて重要なものでした。これによって円盤問題にかつてないほどの威信が与えられたからです。この討論会は高度の知的な論証に基づいて行なわれましたので、この種の情報をもっと与えてくれという電話が学者連から次々とかかってきたほどです。

バルティモアでは第十三チャヌルによってビデオテープの録画が行なわれましたが、これは毎週一回放送して二ヵ月かかります。ところが最近この放送局からの連絡によりますと、視聴者の円盤問題にたいする関心が高いため、このテープは毎日放送されて、そのためにテープが足りなくなったので、追加出演してほしいということでした。これはわれわれの努力によって一般の関心が増大しつつあることを示しています。

ボストンではボブ・ケネディーとの対談に出演しましたが、やはり一般の関心の高さがよくわかりました。この対談は三十州にわたって放送されています。ウォーチェスターではカラーテレビに出演しました。こうした各放送局からは多数の礼状が来ましたが、むしろ円盤問題に関心のある一般大衆に呼びかける機会を与えてくれた各放送局にたいしてこちらから謝意を表明したいとこ

ろです。放送関係者の協力はわれわれに大いなる勇気を与えました。この人たちは円盤研究の分野で新たに台頭した強力な前衛となったからです。この人々は円盤の目撃例にさほどの関心はなく、むしろ宇宙哲学に興味を示しています。円盤の目撃例というものはみな大同小異にすぎないからです。多数の目撃事件はブラザーズ（訳注。他の惑星の兄弟）が依然として地球の周辺を飛んでいることを証明しますけれども、しかしそれだけのことです。

現在はブラザーズが当初にもたらした哲学を生かす方向へと変化しつつあります。世の中をより以上によくするにはそれが必要です。惑星人の計画は地球の人類と他の惑星の人類間のよき関係を確立するからです。これこそ地球の文明の存続を願うための唯一の拠点です。今や円盤にたいする興味本位の時期は過ぎて行動の時機となりました。喜ばしいことには、社会で重要な地位を占めている人々のほとんどが初めて真実の関心を示しつつあります。この種の知性によって真実が広がることをわれわれは期待できるのです。

私は次のことをたびたび言ってきました。真理は望む人のすべてに知られるべきで、当初さまざまのグループがやったような秘密結社的な団体を組織して多数者の参加を拒否してはいけないと。だからこそ私は団体を組織しませんでしたし、また如何なる団体にも参画しなかったのです。真理は万人のものであると私は考えています。

ところが最近になって、私が一、二種類の団体の勢力下に巻き込まれてしまい、私自身が変化したと言われています。しかし、あらゆる進歩はより高度な知識とよりよき生活の方向へ進む一つの変化です。ゆえに、かりに私が或る種の勢力下にあるとしても（訳注。実際には何の勢力下にもないのです）その勢力は私を見捨てないでしょう。ここ数年間ほど大きな進歩をとげた時期はかつてないからです。私のとなえてきた哲学はこれまでに実行されてきました。多くの機会に私は、世界の大宗教団体に他の惑星に人類が存在することを認めてもらう必要があることを述べましたが、それは次第に実を結びつつあります。もし一つの大宗教団体が惑星人の存在する事実を認めるならば、その知識は世界中に広まり、他の宗教団体もそれに従うようになると考えられます。しかしこのことは急速に達成できないでしょう。

次はヴァティカンの機関誌に掲載された記事の再録です。或る一つの宗教団体が自分たちこそ宇宙の真理の体得者であると思っているとすれば、これはきわめて独善的に見えるかもしれません。しかしこれまでこの地球こそ人間の住む唯一の惑星であったと考えてきた或る独善的な社会こそ何ら期待の対象にはなりません。問題は独善的に見えることではなくて、宗教が惑星人の存在の可能性をすでに認めている点にあります。世界の聖職者が説教壇から惑星人の哲学を説くようになるのもそう遠くはないでしょう。ブラザーズや私が期待してきたことは今や実現しようとしているのです。

さて私の親友であったアグニュー・バンスンが飛行機事故で死亡しました。彼がかつてウィンストン・セイレムで私の講演会を主宰して、右の問題に関して聖職者たちに話をする機会を与えてくれた日のことを忘れることはできません。当時聖職者の多くは惑星人問題を嘲笑しましたが、今や彼らはそれに直面する必要にせ

まられています。（訳注。バンスン氏については本誌前号を参照）

以下は〝ヴァティカンはすでに宇宙伝導団を訓練中〟と題する記事の一部です。

「ヨハネス二十三世の当時すでにヴァティカンは地球の宇宙船が他の惑星に到着して知的生物を発見した場合、どのように対処すべきかの問題を考慮していた。このためきわめて活発な神学上の討論会が行なわれて、一九六三年二月に、ヴァティカンの公紙〝オセルヴァトーレ・ロマノ〟はその意見を掲載し、他の惑星の人類の状態について理論づけた。他の惑星の人類は罪を知らないのだろうか？　また彼らはアダムが堕落する前に持っていた超自然的な能力を有しているのだろうか？　それとも汚れ果てていてそのために救済を必要としているのだろうか？　神学者の大半は後者を信じる傾向にある。宇宙空間の如何なる場所にも無原罪ということはあり得ないからだというのである。ゆえに惑星人といえどもいつかどこかで罪をおかしているにちがいない。惑星人の宗教はわれわれには未知である。しかしいずれにしても惑星人を罪から救い出し、カトリックの教義を知らしめることが教会の義務である。

〝彼らは人間なのか？〟この惑星人なるものは人間の形態を有しているのか、それとも彼らの心はわれわれには完全に未知の形態の中に存在しているのかという問題についてまだ悩む必要はない。われわれの救済の教義の伝達とそれによる和解は常に他人にたいして可能である。しかしこれをどのようにして行なうか、だれが選ばれるべきか？　そこで、最近ヴァティカンのサークルから知ったのであるが、今や神学者の少数グループが未来の宇宙伝導団の訓練法研究に熱中しているとは驚くべきことである。これには次の二つの方法がある。

一つは、すでに訓練されている宇宙飛行士を使用するのである。月旅行または惑星間旅行用に訓練されている若いアメリカ人のなかにはヴァティカンと密接な接触を持つ人が二人いるといわれている。しかしヴァティカンにとって最も重要なのは二番目の方法である。すなわち少なくとも二十四名のまだ学生である青年が最もありそうにない仕事―遠い惑星へ伝導に行くという仕事―のために注意深い訓練を受けているのである。彼らは特殊な技術的な訓練以外に、いつの日かロケットの乗員の一人として参加の許可を得るのに必要なあらゆる教育を受けている。出発前には聖職者になるはずである。

彼らの使命の内容についてはすでに公式に声明されている。すなわちカトリックの教義を最遠方の惑星にも伝えることである。たとえ一千年かかっても―。しかし準備しなければならない。いつか実現するかもしれないからである」

以上は進歩を意味する一つの変化です。宗教も科学と同様に進歩しなければなりません。それゆえ真理の光は長い闘争の後の暗雲を貫いて自らを現わし始めています。

さて各国政府はこの方向に動いているでしょうか。私は「動いている」と断言します。そしてわれわれが惑星人から学んだようなタイプの社会を建設するよう努力しています。ときにはその努力が遅々たるものに見えるでしょうが、緩慢な進歩こそ着実な成長です。

ジョンソン大統領は、いつか世界は自動化時代を迎えるように

なるだろうと言明しました。たしかにこれまでのように技術の分野で活動し続けるならば、他の惑星でやっているように人間の労働を機械とロボットがかわってやるようになるでしょう。そして人間によるこの創造は人間の必要物を供給し、よりよき世界にするための時間を人間に与えるでしょう。短気な感情的な人間が人類を絶滅させるボタンを押しさえしなければ、右の機会はあるのです。

米政府はすでにこの線に沿って出発しています。健康な繁栄する社会を持つためには、多くのトラブルをひき起こす原因が除かれねばなりません。だれも知っているように、この汚点はすなわち富裕のさなかに存在する貧困です。それは病気、犯罪、その他多くの悪の要因であって、それが除かれればこうした悪しき現象は消滅するでしょう。世界のトラブルの原因をつかんで、人間にでなく貧困にたいして宣戦をした政府の先見の明に感謝してよいでしょう。他の惑星でやっているように、新しい社会は宇宙的な基礎の上に建てられねばならないからです。

〝宇宙の生成〟の中には静止しているものはありません。進歩とは日々の秩序であって、停滞は死を意味します。ゆえにこの一九六四年が一九六五年に移り変わろうとしているときに、われわれに与えられてきた多くの祝福をかぞえることができます。

この十二月中にはこの世で最大の知識を持っていた人の生誕を祝います。キリストの誕生のとき、創造主の意識がイエスとして知られる謙虚な人体を通じて世界の心の中に生まれ出たからです。しかし人間の世界は彼を受け付けず、ついに彼を十字架につけました。しかし真実なるものは容易に排除できませんので、多くの団体がイエスの名のもとに結成されましたが、イエスの教えた原理を生かしはしませんでした。そして始めに示された光の多くは人間の個人的な解釈によって暗くされてきました。その暗雲はついに全く暗黒となったために人類は絶滅の恐怖に直面し、再びキリストを求めるようになりました。もしイエスの教えが受け入れられていて生かされていたならば、破壊の雲は現在のようにたれこめることはなかったでしょう。しかし創造主の慈悲と恩ちょうとによって、希望の光を燃やすためにブラザーズが派遣されてきました。その結果、この世界の多数のすばらしい人々がイエスの教えを生かすことの重要さに気付き始めています。

イエスは一体何を教えたのでしょう？　それは「父とはあらゆる生命体の意識である」という教えです。彼は自身に言及したとき「私と父とは一体である」と言いました。これは自分の〝心〟と父の〝意識〟とは一体であるという意味です。なぜなら人体の心は意識なくして生きることはできないからです。これはブラザーズの持つ生命の概念の基礎です。彼らは万物を通じて意識が現われているのを見るのです。これがイエスの教えた事柄です。彼は「あなたがたが私を見るとき、あなたがたは父を見るのである。（すなわち万物の生命としての父の意識を見るのである）」と言っています。意識を父と呼ぶのは適切です。それは万物の親であるからです。

多数の人はキリストの第二の到来を待っていますが、この意識的な目覚めは約束された〝再臨〟と言ってよいでしょう。多数の人が今や心よりも意識の重要性を悟り始め、イエスの教えた宇宙の原理のもとに生き始めているからです。このことは、この世界

において永遠の原理が生かされ得ることを示しています。そこで、このクリスマスに際して、明日の新しい生活のために、復活した生命と希望の祝福があなたに来ることを私は祈るものです。

意識といえば、〝生命の科学〟講座がまじめな研究者にどのような結果をもたらしているかについて、ここで報告しておきましょう。最近の講演旅行で、あの講座を研究している多数の人にいましたが、講座の応用に成功したという実例をあちこちで聞きました。肉体にできた悪性腫瘍が消滅したという人々もありますし、不幸な生活状態を明るい繁栄の状態に転換せしめたという人々もあります。また多数の人は化粧品を用いないで肉体を美しく若返らせたと言っていました。何よりも重要なのは、この人たちはそれまで知らなかった自己の半身（意識）に気付くようになったということです。その他に多くの奇跡が発生していますが、次にその中の一例として或る人から寄せられた手紙の一部を載せてみましょう。

「私が現在の家に住みついてから二年半になりますが、庭に一本の大きなリンゴの木があります。もとそれを植えた人は十五年間どのように手を施してもその木に成功しませんでした。まともに成長しなかったのです。やがてその人は移転して今は三軒へだてた所に住んでいます。また、かつてここに居住していた隣家の家族は二年間いましたが、その木が役に立たぬので切り倒そうかと言っていました。しかしどうにかそのままになっていたのです。ところが約三ヵ月前に私が〝生命の科学〟講座を読んだとき、私自身ばかりでなく接触するあらゆる物事に変化が起こったように感じましたので、その木に近づいて一本の枝を手でつかみ、それが美しい木であることを心中に描いて、教えられたように結果（現象）の奥にある因について思念をしたのです。するとどうでしょう。現在は村の一大奇跡となって、かつてその木を知っていた人はすべて驚嘆しています。その木は絵のように美しくなったからです。枝が見えないほどに花が咲き乱れていて、薄青色や乳白色、赤味がかった色など、豊かな見事な色彩に満ち溢れています。人々は一様に私がどのような処理をしたのか、どんな肥料を用いたのかと尋ねます。そこで、私が行なっている研究を自分がもっと充分に理解したならばお話しようと答えることにしています。私の奇跡はリンゴの実がなるまでは充分とは言えません。私の感じが正しければ、その実は木に咲いた花と同じほどに美しいものになると思います。これまでのようなスモモの実の如き貧相なものではないでしょう」

〝生命の科学〟講座を研究する人は、講座が完了した後も自己の生活にもろもろの変化を証拠として起こすばかりでなく、宇宙からの啓示をずっと受け続けるでしょう。ただし充分に研究していれば、自分の内部に感じる諸変化に驚かなくなるでしょう。新しい物事というものは自分の一部になるまでは奇妙に感じられるものなのです。

質問に答えて

問　人間は宇宙の法則に反するような行為をした場合、それにたいして必ず償いをしなければならないのですか。

答　宇宙の外部には何もありませんので、宇宙の法則に反する物

事は先ずそれを修正してから、しかる後その法則に従う必要があります。

問　不正な行為をしたままで、やりっぱなしの人もあるようですが―。

答　如何なる人でも不正な行為をやりっぱなしですますことはできません。人間は意識から自身を分離させることはできないし、第一、自分自身から逃避することはできないからです。本人の意識は修正を要求し続けます。頑固な高慢な心は五十年またはそれ以上も（訳注。終生の意）この修正を拒否し続けるでしょうが、修正が遅れればますます償いは大きくなり、やがてはその償いを実行しなければならなくなります。これは病気とか貧困とか、その他さまざまのかたちでやって来ます。人間は自己の責任をのがれることはできないからです。その一例として私自身をあげてみましょう。私はこれまでに幾度も意気消沈し、何度か挫折しそうになりましたが、一方私の指導を求めている多数の人にたいして責任を感じていました。もし利己的な気持を起こして活動を放棄していたならば、私は個人的にはしばらく有利だったかもしれません。しかしそれから先はどうなったかわかりません。

そうした利己主義的行為は本人を一たん停止させ、生命全体について考えさせて、行為の償いを割り当てます。人間は他人の忠告だけに従って生きることはできません。むしろ他人の援助によって行なわれる〝非利己的態度〟への反省が役立つのです。人間というものは自分の持つ問題には慣れてしまいがちですから、主要点を見すごすことがありますが、他人はそれを直視することができます。普通の学校にせよ生活という学校にせよ、これこそ（その主要点を直視するという行為こそ）教師が負わねばならぬ責任です。修正される側の人は容易にその修正を受け入れようとはしません。むしろこれは教師や指導者の如き多人数を扱う人々が直面すべき問題です。かつて私のもとにいた助手たちが私から離れたとき、彼らは各自の責任を無視したばかりでなく、指導を求めていた人々を混乱させました。この種の行為によって償いは二重となります。一見したところ彼らはうまくやっているように見えますし、彼らの態度は正しかったと言う人もあるかもしれません。しかし明日という未来はどうなるでしょう？　明日になってもうまくやれるでしょうか。それとも償いをし始めることになるでしょうか。しばらくのあいだは物事が順調にゆくように見えても、そのうち不快な物事が起こるかもしれません。同じ人間が二人といないために、これには個人差がありますけれども、結局宇宙の法則をごまかすことはできません。

〈火星ロケットのマリナー三号について〉　たとえロケットが火星に到着しても正しい情報が一般へ公表されるかどうかはわかりません。火星人は地球の機械が火星の周辺を〝探索〟することを好みませんので、この実験にはトラブルが起こるでしょう。これについてはもっと詳細な情報が入り次第にお知らせします。

十二月十七日から一九六五年一月半ばまで私はケァ州の自宅を留守にします。その間、日曜日の午後の集会は中止し、一月十七日に再会します。私は休暇中メキシコへ行き、そこでユカタン半島の探険に関する準備について、参加を望む人々と共に調査するつもりです。これについては三月に報告しましょう。アリス・K・ウェルズ（訳注。アダムスキーの秘書）が私と同行することにできます。

（16ページへ続く）

答応疑質

一九五三年五月、デンマークにおける講演会より

G・アダムスキー

問　他の惑星の日常生活はどうですか。やはりあちらでも午前九時から午後四時まで働く〝手さげカバンをさげた勤め人〟の生活をやっているのですか。

答　彼らが働く時間は一週で計二日間です。したがって〝手さげカバンをさげた勤め人〟は存在しません。日常生活においてはだれもが自分の能力に応じて義務を果たしていて、そうすることによって最高度に創造主に役立つことを知っているのです。

問　何らかの階級制度があるのですか。

答　ありません。通貨が存在しないし、だれもが平等な報酬をもらうので、階級制度はないのです。各人は互いに尊敬し合います。生活即学校であることを知っているからです。他人の審判者になるほどの人間は存在しません。人間はだれもが意義のある仕事を持っています。この世界でも個人の仕事の程度が熟練で決まるか大学教育で決まるかはさほど問題ではありません。

問　他の惑星の財産権はどうです？

答　だれもが自分に必要な物を所有しています。そして、何かを必要とする限りそれは本人のものです。

問　どんな種類の政府がありますか。

答　それを納得のゆくように説明するのは困難です。こんなふうに言えますかね。―つまりこの太陽系には惑星間会議があって、各惑星はそれに参加するのです。

この会議は必要なときに召集されます　数千年間開催されないこともありますので、開催されるときは重大な意味を帯びています。この点に関しては私の〝土星旅行記〟を参照して下さい。（訳注。〝土星旅行記〟は本誌一九六三年五月・六月号に掲載）

問　他の惑星での日常生活には何らかの画一性がありますか。

答　あなたが考えるような画一性はありません。惑星人はわれわれと違って、人間というものは自由意志を持っており、しかもそれは創造的な支配力によって与えられたということを忘れてはいません。あなたが自由意志を行使するならば、画一性は創造主との高度な一体性を得ようとして存在し得ることになります。それが生活の要素ではありませんか。

問　農業や産業については？

答　われわれの言葉の意味における画一性はこの分野にもありません。

問　日常の交通は？

答　地球とさほどの差はありませんが、推進力に自由エネルギーを用います。

問　宗教については？

答　惑星人は自分たちの聖なる父の存在に気付いていますが、地球の教会のような公共の場所で聖なる物の長所をやたらに誇示することによってその物を台無しにしたりはしません。（訳注。教会も説教も存在しないの意）彼らは神の子として生きなければならないような生き方をし、それによって最高度に宇宙の英知に役

立ちます。それが彼らの宗教ともいうべきものです。

問　気候や植物はどうですか。

答　あなたが眠っている間に金星へ連れて行かれたとすれば、目が覚めてから気候や植物については地球のどこかのそれだと思うでしょう。

問　そこでは慣れなくても心地よく感じますか。

答　それはあなたの言葉の意味にかかっています。気圧は快適です。しかし精神的に高度なそこの生活に地球人が順応するのは困難かもしれません。

問　そこには未開発の地域がありますか。

答　この太陽系の各惑星にはありません。しかし他の太陽系にはきわめて低い段階の人類がいます。われわれにもかつては石器時代があったし、今なお地球のどこかにはそんな地域があるはずです。

問　貨幣制度はないのですか。

答　黄金や宝石が金星に豊富にあったとしても、こんな物は装飾に用いられるだけです。貨幣制度は存在しません。その他の価値規準もありません。

問　円盤のパイロットは或る種のスーパーマンですか。たとえばジョン・グレン中佐みたいな―。

答　そうだとも言えるし、そうでないとも言えます。彼らは志願者なのであって、高度に訓練を受けた科学者や専門家です。スーパーマンというのは不適当です。スーパーウーマンもいるからです。すぐれた生活態度や〝原因と結果〟に関する高い知識によって、肉体的にも精神的にもわれわれがスーパーマンと呼ぶような人間になるのです。

問　金星の生活は永遠の若さの溢れた、日常の気苦労のない一種の〝シャングリラ〟なのですか。（訳注。〝シャングリラ〟はジェイムズ・ヒルトン作の小説〝失われた地平線〟中の架空の楽園の名）

答　そうです。しかし正確には表現できないと思います。

問　金星の動物はどうですか。

答　全般に地球の動物に似ています。しかしいわゆる凶暴な野獣はいません。地球では人間が絶えず動物を恐怖しているために動物が凶暴になったのです。他の各惑星ではすべての動物は人間の仲間であって進化の過程にあります。そしてその資格で真価を認められているのです。

問　惑星人が地球へ来るときはかなりの危険を冒しているのではありませんか。たとえばいろいろの病気がありますし―。

答　そう。たしかに多くの危険があるのです。彼らにとって最大の危険は病気であり、肉体的な故障です。だから地球へ来る惑星人は常に高度な教育を受け、訓練された人なのです。

問　他の惑星では権力欲というものが知られていますか。

答　言葉の上では知られていますが、そんな欲望を起こす人はいません。

問　ネアンデルタール人については？

答　それはサルの一種で、いわば半人間です。

問　あなたは一種の新興宗教であるクリスチャン・サイエンスについて知っていますか。これは一八六六年に米国のメリー・ベイカー・エディー夫人によって創始され、〝科学と健康〟と題する

教典以外に種々の刊行物を発行する世界的な団体となっています。

エディー夫人は「世の中へ出かけて福音を伝えることによって病人を治すのは正しいのだけれども、キリストの死後二百年ばかり経って、ローマの教会が粉飾されてから、人間の精神的な治病能力は失われてしまったのだ」と言明しています。そして治病能力の典拠としてエ夫人は聖書を用いています。

人間がすべて霊的な本質を意識し、唯物的にばかり考えないで、万物が霊的存在であると見るならば、クリスチャン・サイエンスは人々にとって有益なものだと思われます。金星人は病気も戦争も知らないという記事を私は読みました。そこで私は円盤・惑星人間題と同様にクリスチャン・サイエンスにも興味を持っています。それであなたの意見を聞きたいのです。私はべつにクリスチャン・サイエンスに関する正しい知識をお伝えできるほどの資格のある者ではありませんし、誤った知識を口外したくもありませんが、一つの真相をきわめるには多くの探究の道があると思います。

答　あなたがクリスチャン・サイエンスについて多くを知らなくても差支えはありません。参考にはなりました。私は多年にわたって大抵の宗教を徹底的に研究しました。クリスチャン・サイエンスが何であるかは熟知しています。そこの幹部連と討論したこともあります。

あらゆる宗教団体は、自分たちこそ真理への道を教えるのだと称しています。しかし宗教団体が如何に正直であっても、団体の結成それ自体が不自然な境界と差別とを生じがちになります。イエスは「君たち個人はこの私よりも大きな物事を達成できるのだ」と言ったではありませんか。そう言明することによって、万人は宇宙の出であり、そのことをだれもが〝応用〟できる可能性を持っていることを意味したのです。したがってわれわれは特定の信仰の中に自己を失う必要はありません。

だれでも病人を癒やすことはできるのです。人間は常にその能力を持っています。それでもなおこの能力が応用できないのは個々の人間の過失です。つまり信念が欠けているのです。〝宇宙の父〟にたいする信頼、人間を信じようという信念が—。

「求めよ、さらば与えられん」です。しかしあなた自身の内部で求めなさい。そこそ最も容易に神を発見できる場所です。

問　惑星人はあなたが眠っているあいだにテレパシーによってあなたと通信することができますか。

答　睡眠中に直感的に印象を感受することはあるし、それが夢となって表現されるとも言えるでしょう。その印象は前生から来ることもあるし、惑星人を含む人間界から来ることもあります。私の著書〝テレパシー〟にあるように、目覚めているときにも来ます。

何かの事故の夢を見たとき、その事故は不可視の世界で進行中です。したがってその印象は（夢は）テレパシーによって事故から来るとも言えます。

火山が爆発する前にはその切迫した活動と危険とを示す多くの徴候があります。動物—たとえばネズミ、ネコなどは火山をコントロールしている宇宙的な力そのものから起こるテレパシーによって、その爆発を事前に知っています。しかるに人間はその警告に感応しません。その結果がどうなるかは、みなさんがご存知の

とおりです。

問　何かの事故が—この場合は或る爆発事故なのですが—惑星人によって遠隔操作されることがありますか。この事故で死んだ二人の少年が事前にその事故の発生を知っていた形跡がありますが—。

答　少年たちが事前に知っていたということはあり得ることです。そしてこの場合も例の夢の説明があてはまります。しかし惑星人がその爆発をひき起こしたのではありません。

問　私たちが人類の発達に関して何を行なったらよいかを、どうにかして知らされることがありますか。

答　ごく少数の例においてのみ〝天啓〟によって何をしたらよいかに気付く人もあります。あなたはしばしばそれを感じて次のように独り言を言うことはありませんか。「これをやるより他に全く仕方がない」と。それが何をなすべきかの直感的な確信です。

問　惑星人は宇宙的意識なくしてこの地球上に生まれかわって来ることがありますか。

答　ありません！　この地球上で生まれる人は（地球人をも含めて）すべて宇宙的意識を持っています。しかしそれは幼時期に失われるのです！　しかし惑星人のほとんどはきわめて幼い時に自己の正体に気付きます。

問　マリナー二号が発見した事実で米政府が秘密にしているというのは何ですか。

答　金星には人間がいるという事実です。

問　ソ連には〝第二のアダムスキー〟がいますか。

答　たくさんいます。

問　なぜこの地球には極端な獣性を示す人間がいるのですか。—獣性という言葉ではまだ不充分なくらいですが—。

答　この地球には精神的に低劣な人間が住んでいることは事実です。しかし人間は生まれつき獣性を帯びているわけではありません。人間は獣性を母の乳と共に飲み込んだり、学校でそれを教わったり、生活を通じて身につけたりするのです。向上のための改善には、この地球の人間の心を改造する必要があります。そこで、もしわれわれが自分からそれを始めるならば、水中のさざ波のように拡がってゆくでしょう。社会的によい結果が起こるまでに長くかかろうとも、少なくとも自分自身を改善することにはなります。

問　金星人も肉を食べるということですが、これについてはどうですか。

答　肉は必要です。しかし彼らは草食動物だけの肉なら食べてもよいという原理に基づいて食べるのです。それでこのことに気付くならば、地球のニワトリがヒナを食ったりその血を味わったりするのを見れば、ニワトリは人間の食用には適さないことを忘れてはなりません。これからヒントを得れば、大体に魚類は食用に適していることがわかります。

問　惑星人は菜食主義者だということですが、肉食と菜食とのあいだには道徳的な相違があるのですか。動物の細胞は野菜の細胞と同様に人間に適さないのですか。

答　惑星人は菜食主義者ではありません。総体的に言って、野菜、魚、〝肉食をしない動物〟の肉を食べるのは健康によいのです。馬、牛、山羊などは動物を食べませんが、ライオン、トラ、ネコ

などは他の動物を食べます。ニワトリも一度血の味を知ったなら同族のヒナを食ったりします。こうした動物類の肉を人間が食用にするのはよくないのです。したがってわれわれは動物の習性をよく知っておく必要があります。

問　一個人の死と生まれかわりのあいだにどれ位の長さの期間があるのですか。数年かかるのですか。

答　数秒間です。数年もかかることは絶対にありません。常に数秒間です。死期のせまった人が目を閉じるか最後の息を吐く直前に、本人の魂はすでに別な新しい肉体（妊娠した婦人）に移行しています。ときとして人間は死の直前に一瞬気分が立ち直って「美しい物を見た」などと言ったりすることがあります。この理由は次のとおりです。臨終の際、意識はすでに心を離れつつあるのであって、意識はすべてがわかっているのですが、心は生前に常に多忙であったため何らの注意を払おうとはしません。しかし心は最後の瞬間には静まり返るために遠方の光景を見てそれを語るのです。

問　科学者が月探索の努力を続けるうちに、月に住民がいることをいずれ発見するようになるとあなたは思いますか。そうなるとその発見はあなたの体験を疑う人にとって証拠になるのではないでしょうか。

答　一般人が私の体験を疑うことを私はべつに気にしてはおりません。一般人が現在の程度しか考える力がなくても、まだ長い未来があります。科学者は月に人間がいることをいつか発見するでしょう。昔もそうでしたが現在でも月面上に光体の活動や物体の動きが観測されています。しかしそれはまだ大衆を納得させる証拠とはなりません。

問　高度に進歩した人間が月に住んでいるとすれば、なぜ彼らは地球人にそのことを知らせないのですか。比較的近距離なのですから、知らせようと思えば容易ではありませんか。

答　容易どころか実は困難なのです！　過去十五年間に他の惑星の人間は地球の大気圏内に入って来て、無数の着陸を敢行しました。これは今なお行なわれていますが、それでも一般人は信じようとはしません。

問　ここにソ連が撮影した月の裏側の写真があります。この写真について思いあたるフシがありますか。

答　それが完全な写真ならば、そうだと証明できる証拠があります。というのは月には表裏とも直線のスジ（複数）が現われて見えるはずであるからです。ありのままの写真ならば、山脈または噴火口に通じる完全な直線や影のような暗黒の点などが現われているはずです。その直線はハイウェイなのであって、トンネルに続いています。長さは数百マイルもあります。そんな直線のスジを最初に発見したのはだれだと思いますか？　米空軍です。

私はパロマー・ガーデンズの例のレストランにいた頃、大きな月面写真を所持していました。それはテキサス州のマクドナルド天文台からもらったものです。多数の人がそれを見ましたが。或る日空軍の将校連がやって来て、これからパロマー天文台へ行って月の写真を撮影してもらうのだと言っていました。ちょうどその前日に地理学会のメンバーたちが来て、同天文台で月写真を撮ってもらったと言っていました。しかもせっかくの二百インチ反射鏡を使用しないで四十八インチを用いたというのです。その理

由を尋ねると、彼らは口々に、月面上の道路、ハイウェイ、トンネルなどをもっと詳細に写し出すためだと言うのです。そして彼らは私が持っていた月面写真を拡大鏡で調べながら道路やハイウェイなどがあることを指摘し始めました。それらの道路は完全な直線で、数百マイルも続いていて、山脈中に姿を消しており、トンネルの入口でできた影もあり、精密に調べてみると山の反対側から再びハイウェイが出ていて、結局山中にトンネルがあることがわかったのです。また彼らは月面に一個の橋を発見し、まもなく別な橋を発見したが、二度目の橋は次に観測したとき完全に消えていたと語っていました。そこで私は、それは全長約一マイルの大母船に何かの故障があったために二つの山頂間にそれを橋渡しにし、修理用の巨大な機械を移動させるために別な大母船を持ってきて別な二つの山頂間に橋渡しにし、機械を揚げるためのクレーンの役目をさせたのだろうと話しました。したがって修理が終わったので大母船が見えなくなったと考えられるわけです。（訳注。月面に観測された橋として有名なのに〝オニール橋〟がある。一九五三年七月二十九日の夜、ヘラルド・トリビューンの科学記者ジョン・オニールが望遠鏡で月を観測中〝危機の海〟に巨大な橋が出現しているのを発見した。英国の天文学者H・P・ウィルキンズ博士もこれを発見し、英国天文学協会のパトリック・ムーアも観測した。しかしまもなくこの〝橋〟は姿を消した）

問　惑星人はなぜ公然と姿を現わしてだれにも話しかけないのですか。

答　そんなことをすれば惑星人はわれわれよりも大バカだということになります。一九五六、七年にメンデス・フランスがフランスの首相であった頃の一事件を話しましょう。一機の宇宙船がフランスの線路ばたへ着陸し、小柄な乗員たちが外へ出て来ました。そしてまた離陸して森林地帯へ飛んで行き、そこへ着陸したかの如く思われたので、多勢の人々がこの惑星人たちをやっつけるために銃やクワなどを手にして現場へ行ったのです。しかし何も発見できなかったばかりか、興奮のあまり仲間の一人を殺してしまいました。

米国では一機の円盤が水を求めて川の付近へ着陸しました。惑星人といえども人間ですからやはり水を必要とするのです。すると数名の少年がそれを目撃して「この次着陸したら奴らを射ち殺してやりたいから許可を出してくれ」と保安官の所へかけ込みました。

一九五四年にはニューメキシコ州のファーミントン上空に五百機の円盤群が出現し、しかも大群集の目前で一人の農夫をさらって行ったという事件がありました。二年後にこの農夫は送り返されて来ましたので、当然のことながら近隣の人たちから質問攻めにあったのですが、惑星人から口止めされていたので何も語らず、真相を家族にだけ洩らしたのです。ところが家族がしゃべり歩いたため、たちまち本人は官憲に捕えられて幽閉されてしまいました。実に五百機もの円盤が出現し、新聞記者連も目撃し、証拠は充分にそろっているのに結局何にもならず、むしろ多くのトラブルや一大恐慌を起こしたような有様です。こんな例は右以外にたくさんあります。惑星人が容易に出現しない理由がこれでおわかりでしょう。

十字軍戦士になるなかれ

C・A・ハニー

重要な事が一つあります。自分が信じている物事を他人にも信じさせようとするのあまり、十字軍戦士や過激論者になってはいけないということです。（訳注。殉教者気取りになったり、メクラ滅法に他人にすすめたりしてはいけないの意）多くの人が十字軍戦士になろうとし、その結果相手から物笑いのタネになっています。過激になると高遠な目的をはずれてしまい、幻想にすぎない物事のすべてが自分にとってもっともらしく思われてくるようになりがちです。

私の場合は情報を求めて私の所へ来る人にのみ知識を伝えることにしています。円盤・惑星人問題を他人に伝えるのに機関誌という手段による以外に、私の方からむやみに他人に語りかけたりはしません。あなたが何かの問題についてよく知っているということになれば、他人の方からあなたへその知識を求めてやって来るでしょう。あなたが出かけて話しかける必要はありません。他人があなたの信じている事柄に興味を持ってくれなければ、それ以上他人に関して時間を浪費しないことです。

これは冷淡に見えますが、実はそうではありません。以前にも述べましたように、円盤・惑星人問題は興味を持たない人のだれにもかれにも知らされるべきものではなく、或る少数の人がそれを知る特権を有しているのです。あなたが円盤問題にさほどの関心がなければこれはショックとなるかもしれませんが、高度な知識に関する限り右の理由が長いあいだ一般化してきています。大学においては何かの学習を始める前に一定の必要条件が学生に容求されます。円盤問題においても同様です。学校では、ただ学生に授業料を払わせたり新しいアイデアの伴った独特な初を学校が持っているように見せかけたいために、初歩の代数を教えもしないでいきなり微積分を教えたりするようなことはありません。代数の知識がなければ微積分など教えてもモノにならないことを学校はよく知っているからです。

円盤問題でもこれと同じことが言えます。人間というものは、高度な原理を理解するためには筋道の立った順序を経て一歩一歩研究しなければなりません。或る知識にたいして自分が〝準備〟できていないとは思いたがらない人は、そのこと自体が右の論点を証明していることに本人は気付いていません。

多数の人は、惑星人の高遠な哲学をガムシャラに世の中に周知せしめ、世間が見のがしている種々の事実を一般人にも知らせるべきだと思っています。またわれわれの円盤研究活動のすべてを、疑う人たちにも及ぼすべきで、相手を納得させるためには断固たる努力を払うべきだと考えています。しかし結果は逆となるでしょう。そこで「ブタに真珠を投げ与えるな」ということになります。

大抵の人はイエスが偉大な指導者であったことを認めています。彼は寓話を用いて人々に語りました。多数の人はなぜイエスがそうしなければならなかったかといぶかっています。その答えは明瞭です。それはクリスチャンを自認する人たちにとってショックとなるでしょう。イエスは自分が話す事柄を一般人に理解させないようにするために寓話を用いたのです。

一般の聖職者は、イエスは寓話を用いることによって一般人の理解を容易ならしめようとしたのだと説きますが、これは聖職者自身が聖書の真実の知識を全然持っていないことを表わしています。正しい意味はマタイによる福音書第十三章十節—十五節のイエス自身の言葉に見い出されます。彼と親しくしていた少数の人だけが寓話の意味に関する説明を聞かされました。しかも寓話の意味が説明されるまでは、彼ら弟子たちも一般人以上に理解することはできませんでした。

イエスは常に寓話でもって群集に話して（マタイによる福音書第十三章三十四節）、当時それを聞くべき運命にあった（聞くことを許されていた）少数の弟子たちに自分の言葉の真の意味を洩らしました。「運命のもとにある（許されている）」という言葉は聖書中に四度出てきますが、どの場合もそれは「或る人々は或る知識に接触するように運命づけられている」ことを明らかにしています。このように或る出来事または行為は或る人々に発生するように運命づけられているのですけれども、ただしそうした出来事の〝結果〟は運命づけられてはいません。自由意志を持つ人間は二つの道を行くことができるのです。

なぜ或る物事が少数の人にのみ起こるように運命づけられていて、他の人に起こらないのでしょう？　或る人々は前生において確立されていた一定のゴールを達成するためにこの地上に生まれています。また多くの場合、この人たちはそのゴールを達成するために地球上で生まれかわることを志願します。だからこそ彼らはその達成に必要な或る種の物事に直面するよう運命づけられているのです。類似の物事に直面する他の人でも、その知識を理解し応用し得るならば、進歩の正しい段階にあるといってよいでしょう。大衆も同じ物事に直面したり聞いたりするかもしれませんが、理解力と進歩度の不足のためにその知識を全然吸収できないのです。

以上を別なふうに説明してみましょう。円盤・惑星人問題や生まれかわり説に関する知識にたいして準備できていない人は、円盤の写真や書物などの資料に接したところで、彼らは資料の提供者を狂人視し、関心を示すものではないのです。加うるに〝十字軍戦士〟によって一般に流布されている円盤情報の殆どはいかがわしい内容のものか、少なくとも嘲笑の的になるようなものばかりです。通常それらは空想とナンセンス以外の何物でもない霊的、心霊的な空間旅行の記事などです。だからこんなものを読んだあとは円盤研究から離れてしまうのです。

あなたの所へ知識を求めて来る人に白日夢やナンセンスのかわりに科学的な事実を得させるということはきわめて重要です。これを行なうのに最上の方法は、相手に最初から卒直にその知識を与えることであるということが私にわかっています。百人のコンタクティーのうち九十九人までは心霊勢力かまたはカネを求める巧みなイカサマ師にだまされていると言えば、円盤問題に関心を

持つ人には大抵ショックとなります。私はまた次のように断言しましょう。アダムスキー氏著〝空飛ぶ円盤実見記〟〝空飛ぶ円盤同乗記〟〝空飛ぶ円盤の真相〟の三冊こそは充分な真実の知識を持つ一コンタクティーによって書かれた唯一の書物で、大衆に推せんするに足るものであると。後に列挙するような書物に見い出されるナンセンスな記事を読んだばかりに、円盤問題に失望してしまった人が如何に多いことでしょう。真実の惑星人はそのような書物と何の関係もありません。そしてもっともらしく述べられたその情報類はアダムスキー氏の書物から盗用されています。

多くの人が円盤関係書物について質問状をよこし、どの書物の内容が真実でどれがウソなのかを知りたがっています。そこでその真偽を私がはっきりと表明するために、私を非難する人があります。この人たちは、円盤関係の体験を持つと称する後掲の各書物の著者たちはみな大なり小なり大きな円盤問題の一部分をなすのであるから、その努力を認めてやるべきだと考えているようです。しかし実際には大抵の自称コンタクティーは円盤問題の心霊的ニセモノにだまされているのであって、取るに足らないものです。また私が、必ずしも惑星人との体験を主張する人のすべてを後押ししないために、私は宇宙の諸原理をおかしているのだと考える人もあるようです。不正やインチキを暴露することが一体いつから宇宙の諸原理をおかすことになったのでしょう。だれをも喜ばせようとして、インチキだと知りながらあらゆるコンタクト・ストーリーを認めるということになれば、どうして宇宙の真理を伝えることができるでしょう。

惑星人とコンタクトしたと称する人はだれでも多少とも真理に関係があり、全体的な惑星人の活動の一部であると思っている人は少なくありません。一体にいかがわしいコンタクティーというものはたしかに或る活動の一部です。すなわち彼らは金儲けを目的として大衆に働きかけている大規模なインチキ行為の一部なのです。一先ず以上のように断言し、そして真実の円盤・惑星人問題とは何の関係もない書籍類をあとで挙げますが、私はべつにその書籍類や著者たちを攻撃するのではなく、ただ参考までに列記するだけのことです。これらの書物の多くはナンセンスと共に多少の真理をも含んでいますので、あなたが、真実の惑星人はこうした著書と関係のないこと、その著書の中には地球上で活動している真実の惑星人に対抗する〝黒い勢力〟によってそのかされたものもあることなどを銘記しながら、個人感情を排して、真価によってそれらの内容を検討するならば、こうした書物から何らかの益を受けることもあるでしょう。しかしさほどの予備知識を持たない研究者にこれらの書物を推せんするわけにはゆきません。ここではフィクション（作り事）から真実を分離させようとするまじめな研究家の便宜をはかって挙げたまでのことです。再度申しますと、以下の各書物の内容の大部分は完全なフィクションです。

ゴードン・アレンの「三次元の輿から来る円盤」、アンジェルッチの「円盤の秘密と太陽の子」、ペルーのセヴン・レイズ友好団とその関係文献類、ゴードン・コウヴの「だれが円盤を操縦するか」、グロリア・リーの「われわれが地球にいる理由」その他の著書、W・V・グラントの円盤関係著書類、ダナ・ハワードの著書類、コルンバ・クレブスの「来訪する宇宙人、そして月には

人間がいる」、ディノ・クラスペドンの「円盤とのコンタクト」、J・H・マナスの「円盤と宇宙人」、ハワード・メンジールの著書類、ジョージ・キングの著書類全部、レイモンド・バーナードの「父の内部から来る円盤」、ジョージ・ハント・ウィリアムスンの著書類、ラインホールト・シュミットの物語、リー・クランドールの「金星人」、カール・アンダスンの著書類、ピーター・フルコスの円盤関係文献や刊行物。霊飛行体説の文献類。その他、円盤は超現実的なものであり、惑星人は本来霊体であるという見地に基づく心霊学的刊行物一切。

くり返しますが、右の各著書は高度に進化した惑星から来る真実の惑星人とは関係のない資料・文献を知るための手引きとして記したのです。それらは論理的な推論に全然役立つものではありません。著者のなかにはたしかにまじめで、自分が実際にコンタクトを体験したのだと信じている人もあります。それで、たとえばグロリア・リーのように、自分の体験が惑星人とは何の関係もなく、実は世間をあざむいている心霊的な黒幕にたぶらかされているという事実に気付かないで、熱心に或る幻影に従ったために死んだ人さえあります。

ところでアダムスキー氏の著書以外に私が推せんしたいのは次の図書です。ガーヴァンの「空飛ぶ円盤と常識」、キーホーの各円盤関係著書類、ルッペルトの「UFOリポート」、C・G・ユング博士の「空飛ぶ円盤」、A・ミシェルの「円盤と直線の神秘」

（6ページより）

なっていて、メキシコ市に建設予定の学園の問題も現地で協議するつもりです。

最近の米国内の講演旅行における途中、私は宇宙船のカラー記録映画を撮影することに成功しました。ウィスコンシン州アプルトンとメリランド州及びボストンの三個所です。編集がすみ次第に一般へ公開する予定です。これは行動中の母船を撮った映画で、公開は二月一日以後になるでしょう。観覧希望の方はその頃に連絡して下さい。

あなたがクリスマスの真の意義を知る歓びによって祝福されんことをお祈りいたします。

お願い

「生命の科学」講座を実習されて何らかの変化を体験された方は、ご面倒でも編者宛に詳細をお知らせ下さい。貴重な参考資料となりますので、編纂した上いずれ発表したいと思います。

その他、この講座に関してご意見があればお寄せ下さい（編者）

ハンプティ・ダンプティ

惑星人の着陸？　〈少年たちの目撃〉

ニューヨーク州コンクリンの町のウッドサイド通りに住む五名の少年たちの語るところによれば、七月十六日に彼らの家から約二マイル離れた野原で惑星人らしき人間とその乗物を見たという。

少年たちはそこを歩いていた。そのあたりがコケモモのやぶになっているため好んで遊びまわる場所だったのだ。すると五十ないし七十五ヤード先に惑星人を見た。とこれは一人の母親の話。「ほんとうだよ！」と子供たちはムキになって言い張り、「ウソをついたら承知しないわよ」と叱られて不服そうにワッと泣き出した。

二人の少年エドマンド（九才）とランディー（七才）はエドモンド・トラヴィス夫人の息子で、それにフロイド・ムーア（十才）、ビリー・ダンラップ（七才）及びゲイリー・ダンラップ（五才）の五名である。ムーア家はウッドサイド通りに住み、ダンラップ家はエディスン通りに住んでいる。

トラヴィス夫人は、午後十二時三十分すぎ頃に子供たちのうち三人が水を求めて家へ走り込んで来たとき、その事件を初めて知った。「子供たちは宇宙人へ水を持っていってやるのだと言うのです。宇宙人の言うことはわからなかったけれど、どうも水を欲しがっているふうに見えたんですって」とトラヴィス夫人は語る。

そこで一人のおとなが他の二名の少年を探しに出かけた。すると二人は野原から家へ向かって帰る途中だった。現場の原っぱはトラヴィス家からウッドサイド通りを約二マイル行った所である。この二人は惑星人を見たことを最初否定したが、後に白状した。彼らは、おじいさんが話を信じてくれず、ウソをついたといってこらしめになぐるのではないかと心配していたのである。

子供たちの話によれば、その〝人間〟は小さな子供くらいの大きさで、人間のような顔付きをし、黒服に黒のヘルメットを着用していた。ヘルメットの頂上にはアンテナ様の針金があり、前面には白文字らしきものが見えた。その人間は両眼にプラスティックまたはガラスのような物を着けていて、奇妙な音を発していたが、それはパイプから出て来るような音だった。子供の用いるカズー笛に似ていたともいう。

その惑星人（らしき人間）はそばの〝乗物〟の方へ歩いて行ったが、機体の一部はカン木で見えなくなっていた。機体は自動車のバンパーのように輝いていた。

〝惑星人〟は〝乗物〟の頂上に上がったので「水はいらないか、何か必要な物はないか」と尋ねたら〝人間〟は乗物の頂上から後方へ降りるように思われた。そこで子供たちはそこを離れて家の方へ走った。後に現場を調べた人は、機体があったという場所にカン木が押しつぶされていて、周囲には脚があったかのように三個所の穴があいているのを発見した。

生まれかわり説を調査する学者

北部インドの一大学で若い一科学者が生まれかわり説を証明（または否定）しようとしている。

ジャイプールのラジャスタン大学パラサイコロジー科長H・N・バネルジー博士は、ときとして〝前生〟の生活を思い出す驚くべき能力を示す人々が存在する例を科学的に解明しようと数年間研究してきた。まだこの現象を合理的に説明する段階に至っていないが、彼はとにかく大量の資料を集めた。現在は生まれかわりの記憶例について諸外国を探し歩いて、各国の資料を蒐集中である。そして約二百件の実例が目下大学で研究されている。

バネルジー博士によれば、或る例（複数）は真実のものとして満足させたけれども、なぜ特殊な人々が全然未知の過去の死者の生涯を思い出せるのか（自分が何某の生まれかわりだと称するのだが）に関する基本的な問題は未解決であるという。

一九五九年に調査されたこのような一例として、中央インドのチャタルプルという町に住むスワルナ・ラタという名の十才になる少女がいる。この少女は或る中流の家庭に生まれ、父親は地方の視学官であった。幼時からスワルナは自分のほんとうの家は数マイル離れたカトニの町にあり、二人の息子があると言っていたそして驚くべき正確さでその家の様子を語ったりした。そこで調査したところ、たしかにその家で十八年前にビンディア・デヴィーという主婦が心臓病のために死んだことがあり、二人の息子が健在であることも判明したのである。

スワルナの家族はかつてビンディア・デヴィーと接触したことはなかった。バネルジー博士はその実例をイカサマでない正真正銘の生まれかわりであるとは断定できなかったが、少女の〝記憶〟の実体を説明することは不可能であった。

「このような例において用いられる〝輪廻〟という言葉は大げさで心霊学的な意味を含んでいる。現在行なっている研究は理屈を抜きにした純粋に科学的なものだ」と博士は言う。生まれかわりの実例が他の如何なる国よりもインドで最も多く報告されているのは、ヒンドゥー教徒が生まれかわりを信じているからである。

調査済みの少し古い例が一九三六年にデリーで発生した。シャンティー・デヴィーという名の十才になる少女が、自分はかつてデリーから七十五マイル離れた町マトゥーラで、妻としてまた母親として住んだことがあると言い出した。この話はたちまち近所の評判となり、十五名の権威者が調査したところ、少女の話は正しかったことがわかった。少女はマトゥーラへ連れて行かれたが、そこで先頭に立って学者団をまっすぐにかつての〝夫〟の家へ案内し、その家にたいして完全な懐旧の情を示して、更に彼女が記憶を埋めた場所を見せるために一行を寝室へ導いたのである。その場所で一個の空箱が発見されたが、彼女の前生の〝夫〟チャウビーは、箱の中の金を自分が取ったと説明した。更に調査によって、チャウビーの妻は一九二五年十月二十四日にアグラの町付近の病院で死亡したことをつきとめた。シャンティー・デヴィーは一九二六年の十二月十一日に生まれており、現在もなおデリーに住んでいる。独身で、きびしい宗教的な生活を送っている。

生命の科学　4

G・アダムスキー

第七課　宇宙的記憶

人間は記憶力を持たないということばないので、記憶力こそ生活の続行にたいして基本的なものとなります。しかし殆どの人が前生における体験を記憶していない理由は、心が過去に得た重要な価値ある物事を記憶する術を全然学んでいなかったためです。心というものは、変動してやまない束の間の諸現象に頼っているのであり、特に「殆ど価値はない」と自我が感じる、重要でない物事に執着したがります。

日常のきまりきった物事は習慣となり、自我を支配していますが、これを記憶と呼んではいけません。人間は〝宇宙的記憶〟をつちかわない限り何にもなりはしません。

これを説明するのに、自分の正体に関する記憶を失った人を例にあげましょう。こうした例はときどき起こります。裕福で、よい地位についていて、家族を維持している人が、自分の正体の記憶を失うとします。しかし本人は他の場所で新たに生活を再建し、家庭を持ち、普通の労働者として働きます。かつての知人から探し出されても、自分は別人だと主張して否定しますが、これはかつての生活に関する事を何一つ記憶していないからです。これは、最初の個性が心にたいして死滅してしまい、一方肉体はなおも正体を保っていることを意味します。

ところが人間の宇宙的な正体ということになれば、右と同様の事が一般人にもごく普通に起こっているのです。これこそ各人が前生についての記憶を持たない理由です。これでもって、現在でもそうであるように前生においても〝意識的な真の自我〟と〝個性すなわちエゴの心〟との分離があったことがわかります。というのは前に述べたように、意識こそは人間の唯一の真の永続的部分であるからです。そしてあらゆる行為が記録されるのはこの意識の中であるのです。したがってもし人間の心がこの意識と混ざり合わぬ限り、本人は自分の正体を見失うことになるのです。

しかし宇宙の意識に自分を同調させた人は、自身の正体をつきとめることができるのであって、その場合、真自我は自分のエゴの心を失ってしまっています。

私は他人にこれを成功させた多くの体験を持っています。前述のように現在の個人的なエゴの心にそれの過去の体験や関係を伝えるのは困難です。これは自分の肉体の心が自己の真の実体の意識すなわち全包容的なるものと混合しなければだめなのです。しかし各結果（現象）の背後には結果ほど明らかでない原因がひそ

んでいることをわれわれは知っています。

そこで、もし心が意識と混合しなければ、それは（心は）生命の海の中で失われてしまうことがあるということがわかるでしょう。だからこそイエスの如き偉大な指導者が「肉体を斬る者を恐れないで、魂を斬る者を恐れよ」と強調したのです。

この言葉の意味を考えてみましょう。人間は二つの魂を持っています。センスマインド（肉体の心）の魂と意識の魂の二つです。いわゆる具体的なもろもろの結果（現象）にのみ執着することによって起こる記憶の喪失のために斬られるのは（無価値とされてしまうのは）センスマインドです。永遠の生命を保つためには記憶というものが基本となることがこれでわかるでしょう。

イエスは自分のセンスマインドを意識と混和させていました。それで彼は「私はこの世にいるが、この世から出た者ではない」と言ったり、その他自身の過去に関して多くの発言をしたのです。記憶を運び記録の書を含んでいる意識なるものに自己を混和させなかったら、イエスもそうした記憶を保つことはできなかったでしょう。

これをなすためには、人はセンスマインドに、神を信頼するように意識を信頼させねばなりません。これにはときとして盲信ともいうべきほどの強烈な信念を必要とします。盲信ということをもう少し明らかにしてみましょう。われわれは物を見るのに道具として目という物を持っていますが、窓ガラス自体が外景を見ないのと同様に目自体が物を見るのではありません。窓越しに外景を見るのは目ではなくて実は〝あなた〟なのです。したがって目を使用して物を見るのは〝あなたの意識〟です。なぜなら、あなたが無意識になるならば、視覚器官はなおも存在するにもかかわらず、あなたはもはや見ることはできないからです。他の感覚器官の場合も同じことです。ゆえに人間は〝意識で見ること〟すなわちセンスマインドが意識と協力することの重要性に気付かねばなりません。もし宇宙的な記憶を持とうとするならば―。すると人間は記憶のページの中から永遠を生きる自分に気付くことができるのです。これは個人が永遠の生命を得ようとする場合に重要です。これがイエスの言葉「自分の（個人の）生命を失う者は永遠の生命を見い出すだろう」の意味です。

われわれは日常において或る程度の宇宙の生命に気付くように心を訓練しなければなりません。これは二つの面を通じてなされます。一つは、〝宇宙の記録〟を読み取るのがきわめて巧みな人による場合であり、他の一つは、あなたの意識があなた自身のセンスマインドに啓示を与えるように仕向ける場合です。しかしこれをなすには心が意識を信頼しなければなりません。この二つを混和させたとき、あなたは啓示を知るでしょう。なぜならそのときあなたは宇宙的な原因とその諸結果をよく自覚しながら生きることになるからです。たとえば私はブラザーズとコンタクトの体験を持って以来、二つの生活面の中に生きています。一つは、私は普通の態度で日常の義務を果たしながら生活してしかもかつてないほどに人生を楽しんでいます。と同時に他方では私の体験や他の惑星から来た人々などについて私は意識的に知覚しています。そのため体験類は日常の行動と同様に私の記憶上で消し去ることのできないものとなっています。

生命の宇宙的な概念を得るためには、自己内部の意識による知

覚力の拡張が必要です。こうしてあなたは二つの面において自分の行為に一層警戒的（知覚的）になるのです。それは飛行機の中にいるかまたは高いビルの屋上にいるのと比較できます。というのは、自分の頭上にある物と同様に眼下にある物をも知覚するようになるからです。あなたは同じセンスマインドを用いているのですが、その場合はただあなたの知覚の範囲が拡がったにすぎません。自身がどこにいようとも、あなたがこれをなすことができるようになれば、多くの過去の体験を洩らしてくれる意識の記憶に関連してあなたは制限なくどこまでも探ることができます。こうして自分の真自我を見い出して永遠の海の中に生きることが可能となるのです。

この生命の特殊な面はぜひとも学ばれねばならない主要な部分です。センスマインドがこれまでやってきたように勝手気ままに行為するかわりに、意識と共に生き始めるならば、右の主要部分を身につけるのはさほど困難ではありません。センスマインドと意識の二つが一体となって生きるとき、結果は著しいものとなるでしょう。この事はこれまでうるさいほどくり返してきた事ですが、くり返しは一つの記憶となります。

このよい例は、生活を共にしようと決めた二人の人間に見い出されます。両人とも各自の生き方の中にそれぞれ異なる習慣を持つ人間ですが、何年かを共に生活した後は、互いに相手の習慣を身につけ合うのみならず、両方が相似た人間になり始めます。これは全く両者が一体であるかのように相手を知覚するようになるからです。犬やネコなどの動物でさえも主人の個性をまねたりすることがあります。そこで結局、絶えず気になるような人または物が身辺にあると、それは（気になることは）そのまま自動的な現象となり、もはや努力は必要となくなることがわかります。人間は記憶のパタン（型）に基づいて行動するからです。ここで気付かねばならぬ最も重要な事は、その記憶のパタンは、いつの間にか人間の個性を作り直すということです。その場合、本人はもう元のままではなく、他人が本人にとってかわったとも言えるでしょう。一方が他方を吸収してしまって両者は一体化したのです。

以上ここでは互いに密接な関係にある二人の人間を例にあげましたが、これはまた多勢が同じパタンを応用する場合に一人だけを代表者にする例にもなります。このことは、われわれが神と呼んでいる意識なるものは全包容的であることを示しています。二人の人間が親密になることによって一体化し、互いに相似てくるのと同様に、一個人はエゴのかわりに常に神（意識）というものを考えるならば、いつか神と一体化し、神に似てくることになるのです。しかし本人の個人性は存続します。ただ普通の人間と違うのは、本人のセンスマインドがわれわれが神と呼ぶところの意識と混和しているという点です。その場合のセンスマインドは従来どおりに日常の仕事を遂行しますが、結果（現象）の世界において賢明に行動するための力と英知とをそれに（センスマインドに）与えている意識なるものの存在に本人は気付いています。するとセンスマインドはイエスが次のように述べた言葉の意味と同じ感じを持つことになります。「私がするのではなく、父が私を通じてなし給うのだ」これが〝宇宙的意識〟です。

意識とは、さまざまの個体をはらんでは生み出す万物の父母です。そしてその内部には設計図または記憶が常に存在していて、

必要なときにはいつでもそれを引き出して照覧することができます。しかしセンスマインドだけではこれはやれません。意識とセンスマインドの両方の組合わせが必要です。なぜなら、われわれが知っているように、センスマインドはいつも結果（現象）から学んでいるのであって、今度こそは結果を生み出す原因を理解しなければならないからです。結果とは一原因の実現ですが、センスマインドはコーズマインド（因の心）がこうあれかしと意図したとおりに正確にそれを遂行しないかもしれません。それゆえ誤解によって過失が生じることもあります。ここに恩ちょうの法則が入って来ることになり、この法則によってセンスマインドは自身の誤りに気付いてそれを修正する機会を持つことになります。しかも進歩がなされる前に修正されねばなりません。それはセンスマインドのためではなく意識のためになされねばならないのです。このようにしてセンスマインドは、真自我がセンスマインドにやってもらおうとする物事を行なうように仕向けられるのです。これがなされないとしても少しばかりの記憶が残るかもしれませんが、その記憶はゆがめられてしまうでしょう。

人間は宇宙的な記憶を持とうとして焦ってはいけません。なぜなら焦りは法則の誤用を生み出すからです。意識は永遠のものであることを常に記憶して下さい。だから意識はどこへも逃げようとはしませんし、急いでもいません。意識自体は全包容的であるからです。これを記憶することによって人は多くの過失を避け得るのです。

永遠の記憶を持ち続け、神すなわち〝至上なる意識〟の似姿になるためには、人間はそれを（意識を）生かし、配偶者の如く生涯の伴侶として共に生活しなければなりません。センスマインドの自我のみについて考えないで、もう一方の意識をも考えて、調和ある一体性を生み出すように二つを混和させなさい。このことがなされると、人は最初に意図されたように神の姿を現わすことになります。これはちょうど、一人の男とその妻が互いを現わし合い、最初の出会いとそれ以後のあらゆる行為の記憶がいつまでも残り、共に人生を楽しむのと同様です。

センスマインドと意識との結婚は、ライオンと小羊とが仲良く横たわっている話で象徴されてきました。このことが実現すると人間は〝永遠〟への途上にあることになり、黙示録で約束されたように〝記憶の書〟があなたの前で開かれるでしょう。

神の目、すなわち意識

われわれはこれまでに各種の宗教で、神はあらゆる行為を見ていると教えられてきました。しかしセンスマインドはあらゆる結果（現象）の不可視な原因までも見抜かないことをわれわれは知っています。このことは、人間は見なければならない物の半分をも見ていないことを意味します。しかし神の一結果である人間は、神が見る物を見る可能性を持っているのです。神が見るようにわれわれが見ないのは、われわれが生命を理解していないからです。

イエスは「あなたがたは目を持っているが、見ない」と言っています。そうです。家が窓を持っているようにわれわれは目を持っています。もし窓自体が話すことができれば、「私が存在するからこそ外景が見えて森が描かれるのだ」と言うかもしれません。

しかし視覚器官は結果（現象）を映しているだけで、結果の生命までも映してはいません。それは窓または鏡と同じです。何かを映すためには原因がなければなりません。ゆえに或る意味ではわれわれ人間は半分メクラなのであって、つまり人生の半分だけしか生きていないのです。イエスは言っています。「死者に死者を葬らしめよ」と。これは死体を運ぶ棺の付添人は死体と同様に死んでいるという意味です。棺の中の死体は生命にたいして無意識のまま横たわっていますが、それを運ぶ人たちも実は〝宇宙の生命〟にたいして完全に無意識なのです。死体はかつて棺の付添人と同様に精神的な生活をすごしたのですが、ひとたび意識が徹退するや精神は沈黙してしまいました。なぜなら意識という真の部分を全然知らなかったからです。

私があまりひんぱんに意識という語を使いすぎると思う人があるかもしれませんが、〝真のあなた〟であるのはこの意識です。それは万物の裏面であり、基本的な力であり、精神生活において最も重要な部分です。なぜなら意識はあらゆる行動の記録係であって、生活を続けようということになれば、センスマインドは自己の体験を記憶しなければならないからです。もしセンスマインドが自己を意識と結びつけなければ、その（センスマインドの）記憶は束の間のものとなります。それは（その記憶は）永遠のものでないからです。しかし前述したように、結びつければそれは永遠のものになるのです。

ここであなたは言うかもしれません。「おれにだって意識はあるよ」と。これは或る程度真実です。というのは、あなたが意識的でなければあなたは生きてゆけないからです。しかしあなたは〝宇宙の意識〟を意識していますか？　この〝意識〟という英知は宇宙のみならず、創造された結果（現象）をも知っているからです。言いかえれば、意識の記録は原因と結果から成っているからです。ですから、われわれが人間が創造された目的を果たそうと思えば、宇宙の意識というわれわれの生命の他の半分を培養する必要があります。意識は、その記録のすべてと共に永遠の生命をもたらすからです。

ではどうすればこれがなされるでしょうか？　それは学校で物事を暗記するのと異なるものではありません。つまり意識が自分のセンスマインドに充分に印象づけられたと確信するようになるまで反覆して唱えることによってなされるのです。（訳注。「私は意識と一体である！」という言葉を常にくり返して言う反覆の技術を意味する）しかしこれは〝宇宙の全体性〟においてなされるべきであって、〝宇宙的視覚〟すなわち〝神の目〟で見ることによって達成できるのです。

あなたを混乱させるような多くの主義・主張にとらわれないようにしなさい。これまであなたの心中によく起こっていたのと同じ種類の反応を期待してはいけません。あなたは花の生命を知覚するとき、その結果（現象）を生み出した英知にも気付くでしょう。花というものはあなたが聞きなれている音声というかたちで話しかけはしませんが、英知に話しかける英知としてあなたに反応を示すでしょう。同じようにしてあなたは万物に話しかけることができます。なぜならその場合あなたは形態だけに気付いているのではなくて、形態を通じて現われている英知にも気付いているからです。

だれでも美しい花を愛するためにここで花を例にあげました。花にたいするあなたの愛が、自分にたいして持っている愛と等しいものであって、また他人の英知を認めるのと同じほどにしっかりと花の英知を認めるならば、花は応答するでしょう。花にむかって「顔を左右に動かしなさい」と命じるならば、この応答が見られます。その花が太陽に従うのと同様にあなたの指示に従うからです。しかしその場合、あなたは英知ある物体に意識でもって話しかけているということを常に記憶していなければなりません。

ひとたびあなたがこれを達成したならば、あなたはセンスマインドを意識に混和させたのみならず、記憶をも培養していることになります。そしてここからあなた自身は拡大し始めて、生命ある万物を自己の中に包容することになります。そして今まで知らなかった生活の他の半分を体験するでしょう。あらゆる行為は宇宙の図書館の中に記録されますので、創造主と同様に必要とあらばいつでもそれに接近することができます。そして生命の神秘は生命の知識によって置きかえられるでしょう。

あなたの各行為は、型式の型の如何にかかわらず、人間にたいするときと同様にハッキリしたものでなければなりません。あなたの受ける〝感じ〟や行為の中に疑惑が存在してはいけません。啓示のかたちで来る〝感じ〟はハッキリとしているはずです。というのは、〝感じ〟は警戒の意識的な状態であるからです。

動物は人間の言語を用いませんが、何かの芸当を動物にさせるように訓練する人は、動物にばかりでなく自分にたいしても絶大な自身を持っていなければなりません。調教師は動物が自分の命令どおりにやることを知っています。これは自身の気持を相手に通じさせることによってなされます。言いかえれば、両者は互いに感じ合うのです。調教師が動物を扱って馴らすのと同じような仕事は、あなたも動物を扱って行なうことができます。ただしその場合、調教師が動物にたいして持っているのと同じ感覚を持っている必要があります。ひとたびあなたが自身のこの部分を発達させるならば、あなたは如何なる性質の制限や分割もなしに宇宙の意識と混和していることを確信できるようになるでしょう。あなたは〝宇宙の生命の海〟の中で行動しているからです。知的にあなたは各要素の主人となっています。これはあなたの生得権です。聖書ではこのことを人間は大地をも含む万物の支配権を与えられたと言っています。しかしあなたは練習することなしにこうした状態になることはできません。また練習とはできるだけそれらを日常生活に生かすことを意味します。

そこで、あなたは最初先ず花で練習を始めてもよいのですが、初めの試みでうまくゆかないからといって失望してはいけません。むしろその技術をマスターしようという決心をますます高める必要があります。古い習慣というものは、あなたがそれを良き習慣の中に吸収してしまうまでは、いつまでもあなたの行手につきまとうことを忘れないようにして下さい。あなたがどこへ行こうとも何を見ようとも行なおうとも、あなたの心が万物の裏面である宇宙の生命と英知にいつも気付いているかどうかを確かめるようにしなさい。あなたばかりでなく、如何なる物でもその宇宙の生命や英知と無関係な物はありません。宇宙の最小の分子でさえも如何なる他の物体と同様に英知を有し、生きていて、自身の目的を果たしているからです。あなたの肉眼はその分子を見ませんが、

あなたの〝意識眼〟は見ることができるのです。それで、ひとたびあなたがこれを自分の生活の一部にしてしまい、自分の精神生活を修正するならば、あなたがこれまでにかかっていた如何なる種類の病気も消滅します。

心というものを創造したのは心自体ではなく、宇宙の意識がその創造者であったということと、センスマインドがそれと混和するならば、創造者が作り出した物なら混和者が修正することができ、それを完全に働かせることが可能であることを記憶して下さい。そうすれば人間の老化現象さえも防ぐことができます。老化はセンスマインドの概念であるからです。人間が自ら年令を重ねるのですから、若さも人間によって得られると言えるでしょう。これは人間が宇宙の意識と一体化するときになされます。宇宙の意識は年令、時間、場所などを知らないからです。それは常に生命の基本的な状態にあり、全包容的であるからです。

ここで私が土星旅行において得た小さな体験をお伝えすることにしましょう。これによってあなたは私と共に意識の中にあなた自身を如何にうまく置くことができるかということを調べることができますし、こんなふうにしてその土星旅行が私にとって真実であったようにあなたにとっても真実であるかどうかを調べることができます。

ケァリフォーニァを離れてから私は一機の円盤の中へ歩いて入りました。するとそれは母船へ直行しましたが、その母船は私がそれまでに乗った如何なるものとも異なるタイプのものでした。その内部には私を夢中にさせるような物が多数ありましたので、奇妙に見える装置類に大変な興味を持ったのです。しかしまもなく私は自分が夢中になっていたことに気付いて、各感覚器官の機能を統合して、本来の旅行目的を思い出しました。これは容易なことではありませんでした。心というものはきわめて利己的で、消化し得る以上に食べようとし、そのためにそれはあらゆる方向に散ってしまうからです。しかし私の意識は「帰途にこの装置類のすべてを見る余裕がある」と語りかけてきました。そこでそうこうするうちに私の心を意識に同調させることができたので、私は与えられた必要なレッスンを吸収することができたのでした。

このとき私の感情は心の好奇心と旅行の宇宙的な目的のあいだにはさまれていました。それゆえ、私自身をコントロールすることが私の義務であったのです。言いかえれば、私は意識という教師である私の真自我へ私自身をまかせる必要があったわけです。この教師は私の個人的なオモチャは必要なときに現われることを知っています。

このことに成功するや私の心は無限の視界へ導く巨大なドアーが開かれていたことに気付きました。そして私は自分の心がそれまで決して聞いたことのない物事の充分な理解を体験しました。それは無限という感じであり、その母船の船体をも含めて乗員すべてが私の一部であるように思われました。その母船は一個の生きものになったように思われ、洋上客船が沈没するときに、その船長がどんな気持がするかを私はそのとき初めて理解したのでした。大抵の場合、船長は乗員を脱出させて自分は船と運命を共にします。もし船長が船を離れるということになれば、彼は船が見えなくなるまで見続けますが、そのとき彼自身の一部が船と共に沈むように感じます。そして彼の一部は決して忘れることのでき

ない船長と共に沈んでしまったのです。なぜなら船の印象はそれほど強烈であったからです。船長と船とはきわめて密接に暮らしていたので、両者は互いに気持をわかち与え合っていた二人の人間のようになっていました。そのため船の生命は船長の生命であったことがわかるでしょう。一つは船長の英知で、船はその従者でした。この状態を通じて両者は一体化していたわけです。

以上は、ひとたび人間が生命の一体化のもとに生きるとき、意識の英知に関連した万物にもたとえられることです。これが、私が宇宙船上にいたときに感じた事柄です。第八課ではこのことをもっと詳細に説明しましょう。

第八課　宇宙の一体性

前課では土星旅行における体験をお伝えしました。そのとき述べましたように、最初私が巨大な母船に入ったとき、私の心は各装置に魅せられてしまいました。しかし私はその旅行の本来の目的に沿うように、自身を意識的な知覚体にするため、この心の浮かれ騒ぎを静める必要がありました。そのときの心は解答も聞かないでやたらに多くの質問を連発したがる子供のような状態でした。そこでセンスマインドを静めて、好奇的にならないように抑制したわけです。これは価値のあることでした。土星における会議中に私は〝聴く〟準備ができたからです。そのときでさえもセンスマインドはさまざまの疑問を起こしたのですが、私は結局それらを無視し、それを口には出しませんでした。そこで会議の終わりには私の心はもはや疑問を起こしはしませんでした。すべての解答が与えられていたからです。

帰途において私は以前と同様に装置類に興味を持ちましたが、そのときは心は忍耐強くなっていて、意識によって与えられる説明を受け入れる準備ができていました。それは元の好奇心ではなくて、知識を求めようという欲求で満ちていました。教室で何ら疑惑を起こすことなしに理解してゆく生徒のようなものです。

そのような気分でもって私は船内各装置の複雑な部分やその目的に充分に気付くようになりました。そして私自身がそれらの一部であるかの如き感じが起こり、私の目的が他との協力にあるのだと感じたのです。このことはきわめてはっきりしていましたが、そのときの私の気持をうまく説明する言葉は今見当りません。しかし鮮烈な印象を受けましたので、その体験を忘れることはできません。

そしてこのセンスマインドと意識との混和状態は、私を運んでいた船をも包括していました。というのは、私の肉体の意識的実体である各分子は船体の各分子と一体化していたからです。しかし各物体の幾何学的なパタンは異なっており、結果の世界においては異なる目的を有しています。だが、〝因〟は同じです。各物体は宇宙の目的に役立っているからです。

言いかえれば、私は、自分が意識的に理解したいと思った部分が意識によって作られていることに気付くことによって、私自身がその部分になったわけです。如何なる物体の分子や細胞もその物の生命である意識が与えられているからです。この生命によって維持されていない分子は存在しません。

ちょうどあなたが他人のクツをはいてみて、その持主の気持が

わかるのと同様に、万物にたいしてもそれがやれるのです。これは実行するのによい方法です。これによれば多くの誤解や心痛を排除することができます。意識を通じて関連し合っていない物は存在しないからです。しかしセンスマインドが意識から教わることに積極的になる必要があります。意識こそ万事を知る者であり、万物はそれの海の中で生きているからです。そしてこの海の中に万物が〝全宇宙〟の完全な表現を求めて一体化されています。

万物は英知の各段階にあります。生命体の九十パーセントは人間が持っているようなタイプの心を持たないために、このことを認めるのは始めは容易でないかもしれません。しかしあらゆる生命体は意識を持っています。それは各個体の生命力であって、自己が創造された目的に役立っています。それゆえ、ひとたび人間の心が他の個体のセンスマインドと関連しながらこの面を認めるとき、混合が行なわれるのです。

第七課では二人の人間が一定期間の親密な関係を保った後、性行が似てくる現象を説明しました。これはあらゆる生命体にもあてはまります。

理解を便ならしめるために説明の仕方を変えてみましょう。最近私は「神とはどのようなものか？」という質問を受けました。神というものを説明するのは容易ではありません。たとえ個人が「神とはこんなものだ」と感じても、それを言葉で表現することはできないでしょう。しかしわれわれは神の創造物を研究することはできます。なぜなら万物は神の意識から生まれてきて、その意識の内部で生きているからです。

誤り伝えられていることが一つあります。つまり創造主は〝老人〟だと考えられているのですが、そうではありません。なぜなら意識は常に生命という基礎にあって、われわれが探知し得る限りでは始めも終わりもないからです。そしてみな知っているように、他の惑星の人間もこの知識を生かして長く若々しい人生を楽しんでいます。

われわれが自然または自然の法則について語るとき、そこには二つの面があります。一つは自然が生み出す物体で、これにわれわれは老化現象を見い出します。そしていわゆる老化現象は、新しい個体に置きかえるために個体の目的の遂行を成就させることにもなると言えます。しかし生命または自然の法則は基礎的な段階においていつも変わることはありません。そしてそれは絶えまのない奉仕のために古い物のかわりに新しい物を置きかえています。こうして各個体は自然の進化につれて、より精妙な質の表現を求めているのです。かくして自然は常に前進しながら決して後退することはありません。これでわれわれには創造主の意識が活動していることがわかります。そして新鮮さのみがこの意識から出て来るのであって、老化は出て来ないので、創造主は絶えず基礎的な段階において生きていることがわかります。

人間が作り出した差別や審判の法則は創造世界には存在しません。太陽は正しい者にも不正な者にも等しく輝きます。人間の心の中には多くの対立がありますが、創造主の意識の中ではすべてが宇宙を形成するための必要な部分となっています。この各部分がなければ宇宙は完全にはならないでしょう。人間とその創造主とのあいだの主な相違は、創造主は創造の目的を理解していて、その中に何らの失敗をも見い出しませんが、一方センスマインド

に振り廻されている人間は意識すなわち自身の真の部分を理解せず、生活を心に頼ってすごしているという点にあります。こうして人間は創造主の創造物に過失があるものと思い、自分で勝手に不愉快な状態を生み出しています。しかし人間が意識と混和して全生命を生きるならば、創造の目的を知ることになり、もはや差別の法則を応用することもなくなるでしょう。

ゆえにわれわれが創造主の完全な表現たらんとするならば、これまで以上に自然を研究しなければなりません。自然は神の意識的な表現であるからです。そして二人の親密な人間が互いに似てくるのと同様に、自然の一体性の法則を観察してそれを応用する必要があります。

あなたが自然という見地からこれをなし得ないということになれば、われわれは過去にやってきたよりも一層よくなし得る別な方法があります。われわれはクリスチャンではありませんが、イエスの教えを応用してそれを日常生活の一部にしてもよく、またはあなたが如何なる救世主を信奉していようとも、その教えを実行して自己の習慣にすればよいのです。これはあなたの親友の習慣があなたの一部になるのと同じです。これを実行するならば多くの不快な物事が理解に置きかえられて、あなたの生活に驚くばかりの変化が起こるでしょう。しかしあなたは自己のセンスマインドに決心させて、〝すべてを知る意識〟の指導に従うように仕向けねばなりません。そうなるとあなたは次のように言えます。「センスマインドであるこの私がなすのではなく、意識が私を通じてすべての物事を行なうのである」これを実行すれば、生命の新鮮さが自分を通じて現われるのです。そして老衰は若さによって置きかえられ、病気は健康にかわり、生活を天国の状態にすることになるでしょう。

ただしこの講座を読むだけではだめで、これを生かすことが必要です。そうすればあなたは自分を支配することになります。そして地上にある諸要素はあなたに役立つでしょう。人間は〝父〟の可能性を持つ唯一の生命体であるからです。しかし先ず最初に意識を〝父〟と認めて、その〝父〟のもとへ帰らねばなりません。人間は自分のためを思って自分の心にいつまでも役立つことはできません。われわれはすべて意識ある実体なのであって、意識という静かな小さな声は、心がなり立てて指示する方法よりももっとよい方法があるぞと自分にささやき続けます。方法を語ってくれるのはあちこちにいる教師や説教師ではなく、万人の内部にひそむ意識なのです。長いあいだ良き生活の方法を人間に気付かせてきたのはこの意識なのであって、人間のセンスマインドがその支配権を意識にゆずり渡すまでも意識はやはり人間にささやき続けるでしょう。

他の惑星の人々はこの理解力を生かしているのですが、彼らもそれに到達するまで長い道をたどっています。しかし彼らは正しい道に足を置いてきていますので、ついには目的を達するでしょう。一方地球人は各種のハイウェイやバイウェイを作ってきましたが、それらは創造主の家にでなく、結局別な場所へ通じることになってしまいました。万物を創造主と一体化せしめる〝意識〟というキィを与えてくれた多の惑星の兄弟たちに、われわれは感謝してよいでしょう。

意識は生命の海ですから万物はその内部で生きています。そし

て宇宙は始めも終わりも知らないので、われわれは多くの興味ある物を包括している広大な大建築物の内部に住んでいることになります。そのためわれわれの興味の対象はAからBへと変わります。これは高い塔の頂上に立つことにたとえてよいでしょう。東方を望めばその方向にある物が見え、西方を望めばその方向の物が見えます。同様にセンスマインドが〝意識的な知覚〟に興味を持てば、それは意識という家の中のあらゆる物を見たがることになります。これは冒険かもしれません。というのは、知識を求めようとするこの餓えは短気を促進するかもしれないからです。その結果は混乱が起こるでしょう。それゆえ心は自制を学ばねばなりません。この悟りによって心は物事の連続の中に一歩一歩知識を得るのです。分裂や神秘をひき起こす割れ目も存在しないでしょう。心が持つ興味は時間というものが含まれない性質のものであるべきで、ただ一歩一歩が何を差し出そうとしているかを知るだけです。すると次の一歩を踏み出さねばならぬとき、心から来るかもしれない異質の要素を何ら伴うことなく例の混和状態が起こるのです。

完全な啓示が来ないうちに意識が啓示しようとしている事柄について疑惑を起こしてはなりません。また何物をも恐れてはいけません。恐怖は人生のレッスンの連続を中心せしめることになるからです。あなたはすでに知っているように、心は過去の誤った教えによって、理解できない物事を恐れやすく、不快なものを排除しやすいのです。しかしわれわれは、あらゆる現象は互いに調和し合っていること、また宇宙が完全であるためにはそうなくてはならないことなどを知っています。このことが心によって理解されるとき、美しい情景が展開し、はめ絵の各部分は完全な絵を作るために適当な場所に落ち着きます。

もしあなたが短気、または利己的な仕事を通じてセンスマインドから来る干渉に気付くならば、子供をしつけるような調子でセンスマインドを訓練しなさい。これはただちに行なう必要があります。そうしないと、そのはめ絵から何かが失われて、その結果混乱を招くでしょう。

以上の部分を読者はしっかりと把握する必要があります。今後この講座で〝宇宙の意識の海〟を探究するからです。これによって読者次第では多くの啓示が来るでしょう。そして心は自己が見るものを嫌悪する傾向が起こるかもしれません。たとえばあなたは、前生（複数）で無数の異なる表情をしている自分の姿を見るかもしれません。そして心は、各感覚器官の態度如何を考慮して、それらに差別をつける傾向があります。そこで心は真実に直面することを学ぶ必要があるのです。というのは、生命はただ単に甘味だけでできているのではなく、その計画中には酸味もあるからです。その両者を組合わせることによってわれわれは快い結合状態を得ます。人間の肉体と心を発達させて、より精化された状態にしようと思えば、右のようにしなくてはなりません。人間が充分な知識を持とうと思えば、何物をも排除してはならないのです。

われわれが心によって意識の世界の探険を進める前に、ここでもう一度次のことを強調しましょう。「センスマインドには限界があるけれども、意識にはそれがない」探険をやろうとしているのはセンスマインドです。これはエゴまたは個体性であり、人間の第二の部分、すなわち意識の〝結果〟です。ご存知のように、

意識は、個体として知られる〝結果〟を生み出す〝真のあなた〟なのであり、それは〝宇宙的な人間〟の可能性と似姿とを有しています。

宇宙的人間は全包容的です。彼はどこへも行きません。というのは彼はいたる所に遍満しているからです。あなたの宇宙的な片割れ（もう一人のあなた、すなわち意識）は、あなたを案内して宇宙という家の中で旅をさせ、部屋から部屋へ、行為から行為へと導いて、あなたの持つ遺産を理解させて、それによって全体と一体ならしめます。

あらゆる信仰や宗教はもといわゆる神秘思想または超自然現象に基づいていました。超自然現象とは万物の背因すなわちわれわれが神と呼んでいるあの〝意識〟以外の何物でもありません。また理解力の不足のために神秘が作り出されてきましたが、実際には神秘は存在しないのです。知られるものはもはや神秘ではなくなるからです。正しい手がかりを用いれば不可思議な物事の正体もわかってくるということを他の惑星の人々は知っています。彼らは或る程度このことを証明しているのです。

あなたはこれまでに神秘思想や秘学（訳注。占星学、降霊術その他）を探究してきたかもしれませんが、そうした種類の源泉から流される情報類に近づいてはいけません。これらは分裂を有していて、二つの異なる対象を扱っているからです。一つは物質的なもので、他は霊的なものであって、この両者が恐怖と理解力の不足によって大きく分離されてきているからです。一方、われわれは〝真理〟を扱っています。

ひとたびあなたが自分の心を意識という子宮の中にまで拡げるならば、神秘的な分野に属するものとしてかつてあなたが読んだり聞いたりしたことのある物事の何かを見ることになるでしょう。もしあなたが自分のレッスンをうまく学んでいるならば、これらの物事の背後に何がひそむかを理解するでしょう。そしてさまざまの神秘主義的団体または宗教を通じてしばしばひき起こされる異常な現象の原因が何であるかがわかるでしょう。

あなたが体験するかもしれない各種の〝感じ〟によって迷ってはいけません。なぜなら、実は肉体や脳の中の無数の細胞はこれまでなすべき仕事がなかったのです。それらは冬眠していたのであって、利用されるのを待っていたのです。そこであなたの宇宙的真自我にたいして心が関心を持つならば、それは細胞に行動すべき好機を与えるでしょう。そして細胞群が行動を始めるにつれて、あなたは〝感じ〟の相違や、過去に持ったことのない意識的な警戒状態に気付くでしょう。あなたが或る種の怠惰な脳を働かせ始めるにつれて、頭の中に或る奇妙な、かすかな脈動を感じることがあるかもしれません。しかしまもなくその怠惰な細胞は他の細胞と融和して、しまいには脈動を感じなくなります。右は、余分の細胞を働かせる必要が生じた場合に起こるのです。これまで脳の細胞の半分以下しか働いていなかったからです。

私が以上のように説明するのは、何か工合の悪い事が起こったとあなたが考えて助けを求めたりすることのないように仕向けるためです。私が言わんとする方法は、従来どおりの〝結果〟という半身（肉体）のみに頼らないで、完全なる人間を表現する方向に向かってあなたのセンスマインドの活動を拡大することにすぎません。

この活動によって体内に起こる一種の脈動現象を〝頭の中の連打現象〟と呼ぶ人もありますし、トンツーのモールス符号に似ているという人もありますが、そのいずれでもありません。神秘主義者の中には、これを死者または他の惑星からのメッセージと考えている人もありますが、これは真相をよく知らず、各種の神秘的な力が実在するものと思っているためです。こうした体内の脈動は、実際にはセンスマインドの構成分子がより大きな関心の分野の中で拡大したためです。

多くの神秘主義者は、未知なるものの正体を知ろうとして各種の刺激物を用いていますが、これは一時的なものであって、大抵の場合は幻覚か本人の欲求の反影現象を起こすにすぎません。これはもちろん不自然であって、個人にとって有益な知識をもたらすものではありません。自然の法則を知り、それに従うことによってのみ、永続的な知識が得られるのです。だから知恵の言葉「自分自身を知れ。そうすればすべてがわかるだろう」が長い時代を通じて続いてきているのです。その意味はそれが初めて語られた時代と同様に今日もなお真実なのです。われわれがこうした教訓を生かすならば、意識によって指示される宇宙という図書館、すなわち知識の宝庫へ入れるわけです。

論理的に考える人ならだれでも、各人の正当な継承物であるその知識の宝庫へ入ることの有利さに気付くはずです。意識こそわれわれが生み出された宇宙の家であるからです。他の惑星の兄弟たちは、この悟りに到達することの重要性を示してくれました。これを自己の生活の一部にするかどうかは各人にかかっています。このことはわれわれが地上に家を建ててその中に住み、学んで、ついには更に良き家を求めてそれを去って行くのと変わりはありません。われわれが知識において進歩するにつれて、その知識に適した肉体が新生するにちがいありません。ひとたびこのことを学ぶや死の苦痛は除かれるでしょう。そしてわれわれは常に聖なる父の子であり続けて、ついには父と同様になるのです。ただ一つの意識があるのであって、これ以外の雑多なものがあるのではありません。この意識がさまざまの目的を持つさまざまの形態として現われながら宇宙のメロディーを完成しているのです。

しかしこの大きな報いを得るためには、われわれの現在の家（肉体や惑星）を改造して、その中に万人の〝父〟を入れなければなりません。そして〝父〟に従い、〝父〟こそあらゆる知識であり、永遠を通じてのわれわれの意識であることを知る必要があります。われわれが肉体または惑星と呼んでいる現在の家でさえも、理由なくして人間に属するのではありません。人間はさしあたって無知と〝父〟からの分離によってそれらを（肉体や惑星を）自分のものだと主張するかもしれませんが、こうした物は人間から去って行くことがあるのであって、人間はそれを妨げることはできません。これによって結局人間は本来何物をも所有していないことがわかります。要するに人間が何かの所有権を主張している限り、自分を愚者にしているにすぎないのであって、一時的に自分のエゴを満足させているだけのことなのです。

しかし人間から絶対に逃げ去らないものが一つあります。それはこれまでセンスマインドが気付くことのできなかった〝意識〟です。意識こそ万物の背後にある〝宇宙の英知〟なのです。

この先の各課では、宇宙についてもっと詳細な解説を試みるこ

とにし、無知な人々によって応用されていた神秘主義的な方法を用いないで宇宙を旅する方法について説明しましょう。

また肉体細胞の活動についても研究することにします。細胞は人体を構成するのみならず、宇宙全体をも構成するからです。そして宇宙旅行に際してその細胞を如何に応用するかを述べましょう。

最近科学者は、如何なる構造物の細胞といえども、それはその構造物の英知であることをついに発見しました。細胞というものは永遠を通じて一定の目的のために分類されている基礎的なものです。

だれでも実験できるすぐれた或る科学実験についてひとつお知らせしましょう。雑誌〝ライフ〟の一九六四年六月十二日号に科学者の発見した色周波数に関する記事があります。これはすばらしい発見です。というのは、人間の生長にとって全く基本的な二つの発達の面に関係があるからです。それは触覚と記憶です。その実験というのは、被験者を目隠ししたまま異なる三種の色の上に三本の指を置かせて、色から放射される振動によって、各色の名称を当てさせることができるというのです。これは触覚の力を発達させるのに役立ちます。なぜなら、周波数すなわち振動とは、センスマインド上に自らを印する〝感覚〟そのものにほかならないからです。あなたがこの実験で正しく色を言い当てることができた場合は、そのときの〝感じ〟をそのまま記憶するように心がけて下さい。そうすると確実度を増大させることになり、それが身について各分野に役立ちます。そして〝感じ〟すなわち振動は、実際には肉体の各器官に警戒を与える意識なのです。（八課終り）

― 編集後記 ―

◎　前号で紹介しましたアダムスキーの友人アグニュー・バンスン氏が最近飛行機事故で死去されました。氏は米国におけるアダムスキー支持派の第一人者であった人だけに、全く惜しいことをしたものだと、あらためて豪快かつ親切であった氏の人柄をしのんでいます。お嬢さんの操縦される自家用機に同乗しての事故ではなかったかという気がしますが、真相はわかりません。

◎　どこそこの会合でアダムスキーをボロクソにけなしていたという情報が時折入って来ることがあります。それで考えさせられるのは、他人を一方的に攻撃、嘲笑するのはいとも容易であるけれども、多数者から嘲笑される立場に立つのはさぞかし難儀であろうということです。人間のセンスマインドは、人をからかって自己満足を得ようという意欲に満ちていますから、一般に嘲笑はごく普通に見られる現象ですが、それだけにだれしも好き好んで他人からバカにされたくはありませんので、よほどの自信と勇気とがない限り、コンタクティーとして長年月の活動はできないでしょう。結局、嘲笑や非難は科学的な研究態度ではないのであって、私には多くの嘲笑がうつろな自嘲的な声に響くだけです。大体、人間の集まるところ必ずといってよいほど（動物や自然界にでなく）同じ人間にたいする批判が出るのですから、人間の存在自体が私には全く不思議です。「それは地球人がまだ目覚めていないからだ」と言えばそれまでですが、人間の最大の関心事は実は人間であるという事実に大きな問題があるように思われます。こんなことを言うのも私自身がいまだに睡眠状態にあるからにほかなりません。それで、覚醒するのは私自身なのであって、その努力に関する限り私が他人の批判など百万だらとなえてもどうに

もなりません。

◎ 〝生命の科学〟でアダムスキーが説いているのは非常に簡単なことなのであって、「肉体の心を宇宙の意識と融合させよ」という、ただそれだけのことをあれこれと表現を変えて説明しているにすぎません。もともと真理は簡単なものだと思われますが、それをこうまで執ように解説してあれば、知的に理解するのはさして困難ではありません。問題はそれの実験にあります。これはそう簡単にはゆきませんが、実行するとなれば日常生活がそのまま実験室となるのですから、とにかく好都合です。私がアダムスキーの哲学に魅せられるのは、従来の宗教団体に存在した排他的独善性、神秘主義的思わせぶり、げん学的学問臭などを一切払拭した、きわめてすっきりとしたものを感じるからです。淡々たる態度で日常の仕事を行ないながらしかも常人とは全く異なる英知のひらめきを示して周囲の人々をハッとさせるような人間―そうしたものにわれわれがなるようにア氏は仕向けようとしているようです。

◎ 前号の編集後記で宗教について云々しましたが、あれは狂気じみた或る新興宗教団体を対象としたもので、宗教全般を意味するのではありません。ご了解下さい。

◎ キャロル・ハニーの〝テレパシー講座〟は第六回分より〝宇宙科学〟と題名を変更し、最近到着しましたが、紙面の都合でありとにまわしました。

◎ 書状のかわりにテープをお送り下さる方に厚くお礼を申し上げます。ただ包装の仕方に問題がありますので、今後は次のようにして下さい。包装する際に外箱に穴をあけたりしないで（穴をあけるとゴミが入りますから）、テープを入れた箱を更に厚手の大きな封筒に入れて、封をノリ付けしないで封筒全体にゴム輪を二、三本かけます。つまり郵便局の人がいつでも中のテープを取り出せる状態にしてあればよいわけです。そして〝五種便〟と表記すれば、三インチテープで十円、五インチで四十円の送料ですみます。密封すれば書状とみなされて送料は高額になります。

◎ 大阪の近代宇宙旅行協会を主宰される高梨純一氏から丁重な挨拶状と機関誌数冊をいただき、心から感謝しています。今後は機関誌交換のおつき合いをさせていただくことになりました。また同会の東京本部を世話される直井寛伸氏からも何かとご好意にあずかり、これまた有難く存じている次第です。互いに研究態度こそ異なりますが、ゴールは結局同じであるはずです。とかく嘲笑の的になりがちな円盤問題の究明に同会のご奮闘を期待いたすものです。

◎ 本誌のバックナンバー（旧号）は、目下次のものが各少部数残っています。一九六三年五月・六月号、七月・八月号（以上送料共一〇〇円）、九月・十月号、十一月・十二月号、一九六四年一月・二月号、三月・四月号、五月・六月号、七月・八月号、九月・十月号（以上送料共一二〇円）。九冊一括ご注文の場合は送料共九〇〇円。

◎ 今回は発行が遅れて申し訳ありません。年が明ければ倍旧の努力をするつもりです。お手紙、テープ類を遠慮なくお寄せ下さい。（久）

日本GAPニューズレター 1964 11月・12月号

翻訳編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP

島根県益田市益田古川

振替 松江二六三〇（久保田八郎個人名義）

通巻第25号

昭和三十九年12月10日発行

―隔月刊―

頒価一〇〇円・送料二〇円

☆一カ年分送料共七〇〇円